# 研究発表 3

## 安全管理

## 業務改善・ICT・介護ロボット等

## その他（施設系）

| 3-1 | 演題 | ＳＮＳ活用によりご家族満足度は得られるか |
|---|---|---|
| | 副題 | ～コロナ禍における笑顔の届け方～ |

| | | |
|---|---|---|
| ＳＮＳ広報 | 法人名 | 社会福祉法人 たちばな会 |
| 情報発信 | 施設名 | 特別養護老人ホーム　天王森の郷 |



| | |
|---|---|
| 発表者名<br>（職種） | 菊池　優香<br>その他 |
| 共同発表者 | 増尾　和行 |
| 共同発表者 | 川口　泰弘 |
| 共同発表者 | 川口　あづさ |
| 共同発表者 | 小澤　大幸 |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 横浜市泉区和泉町 733 |
| TEL | 045-804-3311 |
| FAX | 045-804-5005 |
| メールアドレス | tennomorinosato@tachibanakai.or.jp |
| URL | |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 当施設は、横浜市と藤沢市の境に位置し、緑豊かな自然に囲まれた環境にある従来型特別養護老人ホームです。定員 150 名（本入所 143 名、短期入所 7 名）。地域密着型通所介護・居宅支援事業所を併設しています。 |

## 研究の目的、PR ポイント

天王森の郷では 2021 年度より SNS の運用に力を入れており、施設内の様子をご家族様や地域の皆様に向けて情報発信を行っている。SNS を用いて、面会制限中であってもご家族様の満足度を得ることができないかと考えた。

## 取り組んだ課題

2019 年に感染拡大した新型コロナウイルスの影響を受け、ご家族の入館や面会が制限される社会となった。お客様とご家族様の直接触れ合える機会はほぼなくなり、お客様の日常を知るすべが限られた環境となった為、SNS を活用してお客様の今を閲覧できるように試みた。

## 具体的な取り組み

① 研究対象
　入所者のご家族様等
② 研究期間
　令和 4 年 9 月　～　令和 5 年 4 月
③ データ収集および分析方法
　1）本入所中のご家族様 70 名（無作為選出）を対象に SNS の活用状況を確認
　　当法人の SNS の周知度や閲覧状況に加え、アンケートにて施設への要望を聴取
　2）結果から、天王森の郷「インスタグラム」の閲覧方法について記載をした資料を送付
　3）送付結果に基づきフォロワー数の変動を確認
　4）フォロワー増＝満足度と評価ができない為、インスタグラムを介した情報発信で満足できるか再アンケート実施。

## 活動の成果と評価

アンケート結果でスマートフォンなどを使用している方は 88% と多いが、うち SNS を活用していない方は 60% と、半数以上の方が SNS をあまり活用していない事がわかった。
活用していない理由を、アプリが入れられないのではないかと仮定。そこで『SNS 未活用』回答者から 20 名を無作為に選出し、インスタグラムの閲覧方法を分かり易く説明した資料を送付した。
配布後、新規入所ご家族や、入所中ご家族様からのアプリインストール依頼、SNS 掲載 NG とされたお客様の掲載変更等があり、フォロワー数は 15% 増加した。
フォロワーの増加が直接満足度と評価できない為、具体的に 5 段階評価をつけてもらうアンケートを再度実施。
約半数が『満足』『大変満足』と回答した。
回答結果から、SNS について半数以上は満足して頂けていることが分かった。
また、施設からの情報発信内容として、『災害時の情報発信』『職員を紹介してほしい』『メッセージ機能を使いたい』などの意見があった。
感染症による入館・面会制限が敷かれる中で、SNS を用いて館内の様子を発信することはご家族様などが遠方であっても、身近に雰囲気を感じることができるツールとして、満足して頂ける有益なものであると評価できる。

## 今後の課題

① ご家族のフォロー数を増やすために、お客様のありのままの日常を見て頂ける専用アカウントの作成を検討
② ご家族様以外の方にも天王森の郷に興味を持って頂ける掲載内容の検討
③ 個人情報の配慮やリーガルチェック
④ 災害時の情報などご家族様が求める情報発信を構築する

| 3-2 | 演題 | SNS 活用までの道のり |
|---|---|---|
| | 副題 | ～イキイキとした施設発信を目指して～ |

| |
|---|
| SNS |
| 情報発信 |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 七葉会 |
| 施設名 | 菅田心愛の里 |

| | |
|---|---|
| 発表者名 | 和田　沙穂里 |
| （職種） | 介護職員 |
| 共同発表者 | 今井　美穂 |
| 共同発表者 | 石綿　千尋 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 横浜市神奈川区菅田町 1122 |
| TEL | 045-470-7788 |
| FAX | 045-470-7765 |
| メールアドレス | kano@nanaha.net |
| URL | |

| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 菅田心愛の里は、特別養護老人ホームとして 100 名の方の入居、ショートステイで 20 名の方がご利用できる施設です。法人理念「和顔愛語讃嘆」のもと入居者様が、自由に自分らしい時間を過ごしていただけるようユニットケアを行っています。 |

## 研究の目的、PR ポイント

今まで当施設の情報発信の手段はホームページ、広報、ブログと限られていた。そこで、新たな取り組みとしてプライベートでも使用することの多い SNS を利用し施設の情報や雰囲気を伝える活動を行った。既存の発信ツールと異なり、開かれたコミュニティでリアルタイム性のある媒体での情報発信は、イキイキとした施設発信に繋がるのではないか。今回の取り組みを通じて検討していく。

## 取り組んだ課題

・既存の施設発信のツールでは外部への情報提供が限定的であるため、SNS を活用しより多くの人へ施設の情報や雰囲気が伝わる内容を発信していく。

## 具体的な取り組み

施設のツイッター（2021/5/5 から）、インスタグラム（2022/4/25 から）を開設し発信を行った。

① 委員会を発足し、既存の情報発信媒体のほかに何を使用して情報発信をするか決める
- 委員会メンバーは介護職員各フロア 1，2 名、事務所から 2 名で構成
- 文章と画像それぞれ単体でも組み合わせても発信出来るツイッターから使用していくことに決定。

② ツイッター活用の方向性を決定
- より多くの人に施設のことを知ってもらう・興味を持ってもらうことを目的とした。

③ ツイッターの運用
- 当番制で週に最低一度の投稿を行う
- すべてのツイートに予め決めた福祉、採用関連のハッシュタグを付ける
- 他媒体との差別化のできる内容として職員の様子が伝わるものも発信する
- 同業種とのつながりを作り土台作りとしてのフォロワーの獲得を行う

④ 新たにメンバーを加え、インスタグラム開設
- 入社 2 年目の職員を新たにメンバーとして加える
- 若手職員中心にインスタグラム特有の機能を活用するなどアイデアを出しインスタグラムの投稿も行う

## 活動の成果と評価

- ツイッター 254 人、インスタグラム 91 人のフォロワーの獲得
- ハッシュタグでの検索時に「話題のツイート」に載るものも出てきた
- その日の出来事をその日のうちに共有出来るため、既存の媒体よりも即時性のあるイキイキとした内容を発信できた
- 若手職員が不特定多数への情報発信を担うことで、自施設に対しての興味関心が高まった。
- 施設内外からの認知度が低く、フォロワーのほとんどが同業者である
- 不特定多数に見られる媒体においてプライバシーを守りながら施設の雰囲気を伝える手段の確立が出来ていない
- ツイッターと比べてインスタグラムの投稿頻度が低い

## 今後の課題

これまでの活動で SNS 運用にあたっての土台作りが出来た。しかし、SNS をきっかけに施設に興味を持ったという事例はなく日々の発信に試行錯誤している段階である。今後も SNS の即時性、気軽さを活かしながら、誰が見ても嫌な気持ちにならない投稿を責任持って行うことでイキイキとした発信を行い、より多くの人へ施設の良さを伝える活動を継続していかなければならない。

# 3-3

| 演題 | 内出血事故減少の取り組み |
|---|---|
| 副題 | 〜他者チェック「あっ！その支援危ないよ。」〜 |

| |
|---|
| 内出血減少 |
| 介護技術向上 |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 ケアネット |
| 施設名 | 特別養護老人ホーム和心 |



| | |
|---|---|
| 発表者名（職種） | 中野　栄介<br>介護職員 |
| 共同発表者 | 津谷　和 |
| 共同発表者 | 飯田　杏菜 |
| 共同発表者 | イン・エー |
| 共同発表者 | 岩田　和宏 |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 海老名市大谷南 3-20-15 |
| TEL | 046-236-4165 |
| FAX | 046-236-6699 |
| メールアドレス | yuki_wakasugi@jin-ai.or.jp |
| URL | http://www.carenet.or.jp/nagomi/ |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 定員 120 名（入居：100 名　ショートステイ：20 名）のユニット型特養（1 ユニット /10 名、2 ユニットの協力ユニット制）<br>施設使命「Life for smile 〜全ては笑顔のために〜」の実現を目指しています。 |

## 研究の目的、PR ポイント

私の協力ユニットの前年度内出血に関する事故・ヒヤリハットは 40％を占めた。原因の大半が「職員の支援」であった為、介護技術の確認・再教育が内出血の減少に繋がると考えた。上期にヒヤリハット増加の取り組み・下期に介護技術の他者チェックを実施、個々の課題にピンポイントで技術指導をした。結果、内出血の減少に繋がった為、報告する。

## 取り組んだ課題

① 内出血事故の原因が「支援の際に握ってしまった可能性」対策が「面で支える支援」と抽象的で具体性に欠けていた。
② 記録に残せていない小さな内出血が多数あり、正確な件数の把握ができていなかった。
③ 支援を客観的に振り返る機会が無く、個々での課題が把握できてなかった。

## 具体的な取り組み

① 上期にヒヤリハットを多く発見・共有し、内出血の正確な件数を把握する取り組みを実施。（※当施設は四肢の内出血はヒヤリハットで記録）毎月ヒヤリハットを共有・対策を検討することを習慣づけした。
② 正確な内出血件数の把握ができている状態をベースに最終目標を下期内出血数が上期内出血数 32 件以下に設定。
③ 内出血形成に至ってしまう支援を明確にする為に、全ての支援が詰まっている「入浴支援」で職員同士支援をチェックし合う「他者チェック」を 3 か月間継続して実施。
④ 他者チェックの結果を集計・共有、課題に対しピンポイントで「どのように支援をしたら良いのか」を考え、介護技術の勉強会を実施。

## 活動の成果と評価

① ヒヤリハット前年度：44 件⇒今年度：302 件（上期：72 件　下期：230 件）と大幅に増加。また上期は内出血形成に繋がるヒヤリハット :16 件だったが、下期は同ヒヤリハット：103 件と内出血形成に至る前で発見する事ができた。
② 他者チェックの実施で「各自気づけていなかった内出血形成に繋がる場面・支援」が明確になった。「体交時・手すりから手を離して頂く時」など内出血形成に繋がる支援が具体的に把握できた。
③ 課題に対しピンポイントで介護技術の勉強会を実施したことで、チェック時に指摘されたことの再確認・取り組みの風化を防ぐことができた。また、他者の傾向を知ることで日常の個々の支援に活かせるようになった。
④ 内出血上期：32 件⇒下期：20 件と目的である「内出血減少」に繋げることができた。下期内出血：20 件の内「職員支援が原因」である事例は 2 件（上期は 32 件の内 18 件）。
⑤ 内出血形成に繋がるヒヤリハット増加によって入居者様個々での原因も明確になった。下期内出血：20 件の内、10 件が同じ入居者様で「秋口から皮膚が乾燥」⇒「ご自身で掻かれる」⇒「掻いた箇所が発赤となり、時間の経過で内出血に変化」と季節や気候による原因もあることが分かった。
⑥ ヒヤリハット前年度：44 件⇒今年度：302 件と増加したことで全体の事故件数も前年度：80 件⇒今年度：30 件と 50 件減少させることができた。

## 今後の課題

① 今回の成果が風化してしまわないように「ヒヤリハットの記録と共有」「定期的な他者チェック」を今後も実施していく。
② 新たな課題（季節や気候が原因による内出血形成）に対しても対策を立てることで更なる内出血減少を目指していく。
③ 全体の事故 50 件減少という成果の内、1 件は「自立度の高い入居者様の転倒事故⇒骨折」と重大な事故を起こしてしまった。今後は自立度の高い入居者様のヒヤリハットを多く発見することで重大な事故を未然に防いでいく。

## 参考資料など


著：竹田幸司　からだを正しく使った移動・移乗技術　中央法規　2021 年 6 月 10 日

# 3-4

| | |
|---|---|
| 演題 | ５類に移行した新型コロナへの感染対策 |
| 副題 | ～４年間の高齢者施設へのクラスター対策から～ |

| | |
|---|---|
| 新型コロナ | |
| 感染症対策 | |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 若竹大寿会 |
| 施設名 | わかたけ訪問看護ステーション |



| | |
|---|---|
| 発表者名（職種） | 大谷　茂<br>看護師等 |
| 共同発表者 | 竹田　雄馬 |
| 共同発表者 | 山岡　悦子 |
| 共同発表者 | 加藤　綾子 |
| 共同発表者 | |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 横浜市神奈川区平川町２丁目４番地２F |
| TEL | 045-548-9296 |
| FAX | 045-488-5330 |
| メールアドレス | wakatakehoukankanagawa1@gmail.com |
| URL | |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | わかたけ訪問看護ステーションは 2021 年 12 月 1 日に開設。横浜市神奈川区を拠点としています。在籍は、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が所属しています。高齢者、精神、小児、終末期と幅広く対応しているステーションです。 |

## 研究の目的、PR ポイント

本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症を保健所にて最前線で対応し、かつ、20 件以上の高齢者施設でのクラスター対策の経験から、高齢者施設での感染症予防と新型コロナウイルス感染症が発生した場合の対応を検討することである。
過去に経験した高齢者施設への対応と最新の国や神奈川県の指針をもとに今後の対策や体制に関して実践的な感染症対策を検討する。

## 取り組んだ課題

新型コロナウイルス感染症が５類となることで、世間的には多くの行動制限が解除される。
一方、今までと同様に高齢者施設においては、新型コロナウイルス感染症による重症化や逝去がないように努めていく必要がある。
５類に移行するにあたり、国等からの新型コロナウイルス感染症対策に対する指針は発信されているものの、各施設ごとで対策の見直しを手探りでおこなう必要となり、各施設での混乱も生じると想定される。

## 具体的な取り組み

・職員への移行に向けた研修会や説明会の実施
・常時行う感染対策のマニュアル作成
・新型コロナウイルス感染症発生時のマニュアル作成
・既存の職員への感染症対策研修
・新人職員への感染症対策研修

## 活動の成果と評価

今までの経験から施設の構造・新型コロナウイルス感染症・介護現場の人員体制等の特性から今後の新型コロナウイルス対策の方向性や必要な感染対策を考えることができた。
新型コロナウイルス感染症の特徴は【発症前から感染性を有していること】【エアロゾル感染】【発症までの期間が短い】【感染力が強い】【ワクチン未接種での致死率が高い】である。高齢者施設の特徴は【新型コロナウイルス対策に不慣れであること】【介護と感染対策が真逆であること】【介護職への感染対策指導の難しさ】【職員数の少なさ】である。このような特徴を踏まえ、当法人では新型コロナウイルス感染症への対策の方向性を定めたことで、必要な対策と国等からの指針に合わせた【現場で活用できるマニュアル】の改訂を 5/8 までにおこなうことができた。
また、変更するにあたり、現場との打合せや説明会を繰り返すことで、現場で活用できるマニュアルができたと考える。

## 今後の課題

・５類に移行後、施設内で感染が発生してないこと
・長期的に作成したマニュアルを運用していき、適宜改訂を行う必要がある
・今後、変異株が出現した際に新たな対策の見直しが必要であること
・現場の介護職の標準予防策の指導は継続的に必要である
・ここ４年で介護に初めて携わったスタッフはコロナ前の介護の温かさを知らないこと

## 参考資料など


・医療機関における新型コロナウイルス感染症への対応ガイド 第５版
一般社団法人 日本環境感染学会　2023 年 1 月 17 日
http://www.kankyokansen.org/uploads/uploads/files/jsipc/COVID-19_taioguide5-2.pdf
・介護現場における（施設系通所系訪問系サービスなど）感染対策の手引き第２版
https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/001048000.pdf
・施設内療養時の対応の手引き（別添２）
厚生労働省発行
https://www.mhlw.go.jp/content/000783412.pdf

# 3-5

| | |
|---|---|
| 演題 | 新聞紙の再利用について |
| 副題 | |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 藤英会 |
| 施設名 | 特別養護老人ホーム　潮見台みどりの丘 |



| | |
|---|---|
| 発表者名（職種） | 内田　裕久<br>介護職員 |
| 共同発表者 | 佐野　匠 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 川崎市麻生区王禅寺 1241-38 |
| TEL | 044-955-1746 |
| FAX | 044-955-1730 |
| メールアドレス | midori@toeikai.jp |
| URL | |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 特別養護老人ホーム　特　養　定員 120 名<br>短期入所　定員 20 名<br>通所介護　定員 30 名<br>居宅支援事業所 |

## 研究の目的、PR ポイント

私たちの施設は川崎市の SDGs ゴールドパートナーです。施設内で行っている SDGs の取り組みについて伝えていきたい。
高齢者施設でも普段何気なく行っている取り組みが SDGs の活動につながっているかもしれないので活動の輪を広げていきたい。

## 取り組んだ課題

- オムツ、パットを捨てる際に使用するレジ袋の削減を目指す。
- 施設内で使用しているレジ袋の必要性を考える。
- 新聞の再利用について。

## 具体的な取り組み

- 高齢者施設では排泄物のゴミは多く、その際に使用するレジ袋の使用量も増えてしまう。代用品として新聞紙を活用する。
- 地域の新聞販売店、ご家族様の協力もあり新聞紙の再利用が行える。
- オムツ、パットを新聞で包む際適度なサイズに畳む必要があるので、入居者様にレクの一環として畳む作業を手伝っていただく。

## 活動の成果と評価

- 私たちの施設では特養、短期入所の方合わせて約 140 名の方が生活しています。排泄物を捨てる際に必要となるレジ袋の枚数は 1 日で約 700 枚。1 年で 255.500 枚。13 年間で 3.321.500 枚。その分を新聞紙で代用できました。
  新聞を持ってきてくださる地域の協力、新聞を畳む入居者様の協力、実際にオムツを新聞で包むスタッフの協力で開設から 13 年継続することができました。

## 今後の課題

- 開設時から行ってきた SDGs の活動内容は当初「環境に配慮した取り組み」を目指して行ってきました。
  その活動が SDGs 活動に繋がっていました。
- 今後は SDGs の活動に向けて新たな取り組みを目指していきます。
  これまでは「レジ袋の削減」を目指してきましたが今後は施設内で使用しているレジ袋をなくす「レジ袋使用ゼロ」を目指していきたいです。

# 3-6

| | |
|---|---|
| 演題 | SDGs 手当の導入 |
| 副題 | ～福利厚生から SDGs へ～ |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 吉祥会 |
| 施設名 | 寒川ホーム |



| | |
|---|---|
| 発表者名<br>（職種） | 関山　真<br>介護職員 |
| 共同発表者 | 木藤　剛 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 高座郡寒川町小谷 1-13-5 |
| TEL | 0467-75-0785 |
| FAX | 0467-75-9963 |
| メールアドレス | shisetu@samukawahome.com |
| URL | |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 30 周年を迎えた特別養護老人ホーム（従来型 64 床）<br>能力給制度を導入し、未経験者・転職者でも評価される施設。理念を『すべての人が歓喜』とし、スタッフのワークライフバランスを充実させるため残業ゼロ・有休消化率 100％消化できる施設。 |

## 研究の目的、PR ポイント

そもそも社会福祉法人って何？
～皆さんは社会福祉法人で働く意味を知っていますか？～
～現在就職している人も社会福祉法人で働く意味を知っていますか？～
理念変革にあたって『社会福祉法人としての役割を果たせているのか？』『法人として社会貢献できているか？』の疑問が生じる。これらを理解・取り組むことによって、いっそう前向きに働けるのではないかと考え取り組むこととなった。
その結果、その一環として「SDG s 手当て」を導入し、SDGs が掲げる目標達成に向けての一員として行動を始めたが、仕事に対する姿勢の変化やご利用者への影響について発表する。

## 取り組んだ課題

介護業界も大きく変わり法人理念を変革する。
前理念の一部でもあった『地域貢献』は引き継ぐが積極的な地域貢献なく、"社会福祉法人としての使命"を理解しているスタッフが少ないことに気づく。
また、社会においては『SDGs』へ取り組みが大きな話題となっており、法人として SDGs への取り組みを行いつつ付加価値として SDGs17 の目標のうち目標 8『働きがい』に焦点を当てて定着率アップ・福利厚生充実に取り組むこととした。

【現在までの課題】
① 積極的な地域貢献（活動）がない
② 定着率ゼロが達成できない

## 具体的な取り組み

① SDGs についての勉強会
　1）社会福祉法人とは何か（使命）
　2）SDGs とは何か
　3）なぜ SDGs に取り組む必要があるのか
② アンケート調査の実施
　1）自分はどんなことができるのだろう
　2）施設としてどんなことが必要だろう
③ 地域貢献に関する取組み
　1）美化活動　近隣の清掃
　2）介護セミナー開催　地域向け介護に関するセミナー・介護入門的研修の開催
④ SDGs に関する取組み
　1）SDGs 手当の支給　1,000 円 / 月（常勤）
　2）SDGs に取り組めていることを感じる
　　女性ネイル⇒利用者にもネイル
　　介護職だけでなく看護師（全体で）がやった

## 活動の成果と評価

【地域貢献活動について】
① 美化活動 /
　感謝の声・地域と交流⇒ボラと慰問が増えた
　介護職のイメージアップ⇒採用した
　介護の相談をうけた（地域包括ケアに繋がる）
② 介護に関するセミナー開催 /
　申込者が増えた
　ケアマネしてほしい依頼
【SDGS への取り組み】
① SDGs 手当の導入 /
　ご利用者にもいい影響
　定着率アップ
　明るい気持ち（髪・ネイル　見た目 9 割）

## 今後の課題

① 地域貢献活動から、地域住民から感謝の声や参加スタッフは徐々に増加。（初回参加数 11 名⇒現在 18 名）これらの活動を続けることにより地域貢献はもちろん、顧客拡大・人材確保（介護職のイメージアップ）へと繋がる工夫が必要。
　独居訪問・空き屋清掃
　掃除がてらの見守りや支援
② SDGs 手当の目的を理解し続け"目標達成"へと向けた活用ができていることが重要。
　順番に発信して承認欲求を得る
　モチベーション高いスタッフからヒントを得られる地域の商店を盛り上げる（買い物して）

# 3-7

| | |
|---|---|
| 演題 | 改めまして　SGK 委員会です |
| 副題 | ～三つのテーマをひとつに～ |

| |
|---|
| 身体拘束 |
| 権利擁護 |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 育明会 |
| 施設名 | レジデンシャル常盤台 |



| | |
|---|---|
| 発表者名<br>（職種） | 仲程　優子<br>介護職員 |
| 共同発表者 | 古屋　倫子 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 横浜市保土ヶ谷区常盤台 74-7 |
| TEL | 045-348-8001 |
| FAX | 045-348-8002 |
| メールアドレス | info-tokiwadai@ikumeikai.net |
| URL | |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 平成 23 年 4 月開設、令和 3 年 4 月に増設し新棟併せ本入居 160 床ショートステイ 20 床のユニット型特養です。開設当初より≪リスペクトケア≫を合言葉に、最期まで「その人がその人らしく」過ごして頂ける様、寄り添ったケアに取り組んでいます。 |

## 研究の目的、PR ポイント

権利擁護委員会を改め S（身体拘束廃止）G（虐待防止）K（権利擁護）委員会として今年度新たに発足。
ご利用者の尊厳を守ることを目的とし、一回目の研修テーマに身体拘束廃止、二回目の研修テーマに虐待防止、権利擁護と三つの視点からの研修を行った。

## 取り組んだ課題

- 三つのテーマに焦点をあてて身体拘束廃止、虐待防止研修を実施
- 虐待の芽チェックリストにて不適切はケアが行われているのかを意識調査
- 原点に返り標語のテーマを「あなたの考える常盤台の介護」として募集

## 具体的な取り組み

- 研修　第一回目　テーマ「身体拘束廃止」
  当施設では身体拘束は行わない為、身体拘束具を知らない職員が多数。身体拘束とは何かを知って頂くべく、身体拘束具ファッションショーを行い実際に拘束具を見て頂き体験して頂いた。
  個人ワークからグループワーク形式での研修を実施。
- 研修　第二回目　テーマ「虐待防止」
  事故防止委員会との合同研修。あり得るかもしれない場面を想定しフィクションな動画を作成し視聴していただいた。個人ワークからグループワーク形式での研修を実施。動画の中で焦点が多くなってしまい複雑になってしまった。
- 虐待の芽チェックリスト配布、回収、集計
- 今年度の標語テーマ「あなたの考える常盤台の介護」
  応募数 33 作品を選定し最優秀賞、優秀賞、理事長賞、施設長賞、課長賞、委員会賞の 8 作品が決定し表彰発表を行った。

## 活動の成果と評価

- 身体拘束廃止研修では、拘束具を初めてみた職員が大半を占めており、「かわいそう」「拘束具は必要ない」等と意見が出ていた。当施設の掲げているリスペクトケアが浸透しており拘束をしなくてもケアは出来る事、拘束は必要がない事の再認識ができたかと思われる。
- 虐待防止研修では、どこが不適切ケアなのか、適切な対応は何か様々な意見があがった。不適切ケアからの起こり得る事故は何か。事故防止として、どうすれば未然に防げるのか。権利擁護の観点からの研修になり「ご利用者の気持ちにたち自分がされたくない事はしない」と日頃の自分たちが行っているケアに対して考えなおす意識に繋がったと思われる。
- 標語については、原点に戻り各々の意識の調査も踏まえる目的もかねてテーマ決めした。
  様々な視点から 33 作品の応募が集まり、「常盤台の介護」とは何かの共通認識に繋がるかと思われる。
- 虐待の芽チェックリストについては、前年度と比較すると目立った変化はみられず。不適切な場面を「見た、聞いた」は増えているので職員同士の声掛けや指摘が少なくなってきている可能性も考えられる。

## 今後の課題

ご利用者の気持ちに立ち尊厳を守ることができる環境の継続、自分自身のケアを見直す機会を作るためにも研修、標語の募集、虐待の芽チェックリストを行い「常盤台の介護」とは何かを共通認識し施設全体の意識向上につながるような内容を企画、提案していきたいと考える。

# 3-8

| | |
|---|---|
| 演題 | 介護業界に未来がきた!! |
| 副題 | ～記録ソフト・インカム・離床センサーの導入～ |

| |
|---|
| ICT 活用 |
| 業務効率化 |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 松緑会 |
| 施設名 | 松みどりホーム |



| | |
|---|---|
| 発表者名<br>（職種） | 田中　知恵美<br>介護職員 |
| 共同発表者 | 岡本　有紗 |
| 共同発表者 | 小倉　青龍 |
| 共同発表者 | 巴　瑛由 |
| 共同発表者 | 三橋　紘二 |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 横浜市戸塚区原宿 2-56-3 |
| TEL | 045-851-8087 |
| FAX | 045-852-4803 |
| メールアドレス | matumidori-home@srk.or.jp |
| URL | https://www.srk.or.jp/home/ |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 社会福祉法人松緑会　特別養護老人ホーム松みどりホームは横浜市戸塚区にある介護老人福祉施設です。<br>現在は 72 名定員の施設で、季節の行事や同一法人の『松みどり保育所』との交流を通した“老幼の環”に取り組んでいます。 |

## 研究の目的、PR ポイント

昨今、様々な業種で ICT 化が急速に進み、人材不足に対する業務効率の改善が促されている。
新しいものを導入したことによる業務効率の向上や、導入する際の職員の不安や定着するまでの過程を、ここに報告します。

## 取り組んだ課題

当施設において、手書きでの記載や伝達、共有における時間が全体の業務を圧迫していた。重要な情報については、施設内で対象職員を探し回らなければいけない事が多く見られた。又、多床室の施設において、居室内の利用者様の行動の把握が困難で、自身で離床困難な方が、離床し、転倒しているケースが見られた。これらの状態の改善を ICT 化を行うことで、解決できるのではないかと考えた。

## 具体的な取り組み

① 手書きでの業務圧迫…【記録ソフトの導入】
導入するにあたり、いくつかの課題が挙げられた。
- どのソフトを入れればよいか？
  →複数のデモを使用し、施設にあったソフト選定をおこなった。
- パソコンが苦手な職員が多い
  →無料の記録ソフトをデモ導入し、練習していった。
- ネット回線が施設全体にない
  →通信環境改善工事を実施し、PC やタブレット端末を準備していった。

② 居室内での転倒…【離床センサーの導入】
居室内での転倒事故を防ぐ為、ラウンド回数を増やしていたが、それでも発見が遅れる場合があり、職員の心理的な負担に加え、業務時間を圧迫していた。
→ベッドの足元に敷く離床センサーを全利用者の居室へ設置した。

③ 必要な情報共有の円滑化…【インカムの導入】
外部からの電話を他課に繋ぐ際や、利用者様の急変で、看護師を探す際に、内線での応答がないと、施設内を探し回らなければいけなかった。
→全職員分のインカムを用意し、リアルタイムでの情報共有をルール化した。

## 活動の成果と評価

ICT 化を行う前後に在籍していた職員 27 名を対象に、「とてもよい・よい・どちらでもない・あまりよくない・よくない」の５段階での回答と、その理由の自由記載で評価を行った。
① 記録ソフト
とてもよい、よいと回答した職員が 92％で、情報の共有と伝達が行いやすい、一元管理ができる、書類が散らばらない等のポジティブな意見が多く聞かれた。ネガティブな意見の中には、「職員によって操作が出来ず、情報が統一されにくい」との意見もあった。
② 離床センサー
とてもよい、よいと回答した職員が 96％で、ラウンドに回る時間が減ったことで別の業務を行うことが可能となった、利用者さんの動きに対して精神的な負担が軽減された等の意見が多く聞かれた。
③ インカム
とてもよい、よいと回答した職員が 86％で、外部からの電話連絡がスムーズ、入浴やイベント時の流れがよくなった等のポジティブな意見が多く聞かれた。
これら ICT 化によって、業務効率が向上し、カンファレンス会議やレクリエーション等を日中に充実させることが可能となった。

## 今後の課題

今回の研究では、デモを用いての練習や ICT 化における意義を明白にしたことで職員にも目的意識が芽生えた。苦手意識の軽減につながり、ポジティブな意見が多く聞かれたのではないかと考える。しかし、働く年齢層や国籍が幅広く、機器よって統一した対応が取りづらいという一面もあり、今後の課題となっているのではないかと考える。

# 3-9

| 演題 | 可視化されたデータに基づく排泄援助 |
|---|---|
| 副題 | |

| 介護ロボット | 法人名 | 社会福祉法人 育生会 |
|---|---|---|
| 排泄介助 | 施設名 | よつば苑 |



| 発表者名（職種） | 和田　善樹<br>介護職員 | 都道府県 | 神奈川県 |
|---|---|---|---|
| | | 住所 | 横浜市保土ヶ谷区狩場町 200 番地 9 |
| 共同発表者 | 木船　卓宏 | TEL | 045-712-8601 |
| 共同発表者 | | FAX | 045-712-8605 |
| 共同発表者 | | メールアドレス | yotsuba@fuku-ikuseikai.com |
| 共同発表者 | | URL | |



| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 社会福祉法人育生会は、平成８年に、特別養護老人ホームよつば苑（保土ヶ谷区狩場町）定員 120 名（入所 112 名、短期８名）開設。令和元年５月に、特別養護老人ホームひまわり港南台（港南区日野南）定員 180 名（入所 170 名、短期 10 名）開設。 |
|---|---|

## 研究の目的、PR ポイント

従来型特養での排泄援助は定時誘導や定時オムツ交換が主な方法となっているが、尿意を伝えられない利用者にとっては、タイミングが合わず「排尿無し」や、オムツ内の不潔な状態が長く続く事での「不快、不衛生」に繋がっている。加えて、不快感や尿意を上手く伝えられない事が認知症の BPSD を引き起こす原因となっているのではと考えていた。今回、膀胱内の畜尿量が視覚化出来る福祉機器「Dfree」の導入により、定時誘導から「お知らせ通知」による随時誘導に切り替えることで、「放尿せずトイレで排泄出来る」よう取り組んだ事例を紹介する。

## 取り組んだ課題

徘徊や放尿等の BPSD が顕著に見られている A さん。尿意はあるがパターンは掴めず、トイレへの定時誘導を行ってもタイミングが合わない。トイレまで誘導しても拒否をされて出て行ってしまう事が多くみられていた。常にフロア内を歩き周っては、誰もいないお部屋やカーテンの裏に放尿を繰り返す。床が濡れた不衛生な環境は、他利用者への２次被害にも繋がることから迅速な対応が求められていた。

## 具体的な取り組み

① 指導者の育成
　各階フロアリーダーへ福祉機器の使用方法をメーカーより説明。
② 対象フロア、対象利用者の選定
　利用者、職員の少ない階をモデルとして優先的教育を行う。
③ ４階介護職員へ勉強会、指導開始 （２週間）
④ A さんへ機器装着しデータ取得、環境調整開始
⑤ 福祉機器からの「お知らせ通知」を基に随時誘導を開始
　可視化されたデータを根拠とし、本人が拒否した場合でもタイミングや介護者を変えて、可能な範囲で随時誘導を行う。

## 活動の成果と評価

＜福祉機器導入前＞
１日１～２回、週４日　放尿有り
＜福祉機器導入後＞
１日０回、週０日　　　放尿無し
放尿が無くなりトイレでの排泄が出来るようになったことで A さんの尊厳が護られる事に繋がった今回の取り組みは、新しい機器を導入し「トイレで排泄する」という「当たり前」に挑んだ職員たちの成長にも繋がった。

## 今後の課題

① 個別ケアへの理解
　介護業界の人手不足により業務量が増加している状況の中で、個別ケアの必要性、重要性を理解してもらえるように創造、実践する事が求められる。
② 福祉機器のデメリット改善
　Wi-Fi 環境、皮下脂肪の状態などにより、データ取得が困難な場合があり、調整期間に時間を要する。
　又、皮膚の弱い方では装着部位に発赤が発生した。

## 参考資料など

トリプルダブリュージャパン株式会社

# 3-10

| | |
|---|---|
| 演題 | 何から始めれば良い？ ICT |
| 副題 | ～施設での実践的 ICT 化とは～ |

| スマホ活用 |
|---|
| |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 セイワ |
| 施設名 | 介護老人福祉施設すみよし |



| | |
|---|---|
| 発表者名（職種） | 関　藍 |
| 共同発表者 | 中西　哲也 |
| 共同発表者 | 佐藤　雅賀 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 川崎市中原区木月祇園町 2-1 |
| TEL | 044-455-0880 |
| FAX | 044-455-0883 |
| メールアドレス | s-sumiyoshi1@soleil.ocn.ne.jp |
| URL | |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | すみよしは、平成 6 年に開設された入所定員 84 名、短期入所 16 名の従来型特別養護老人ホームです。人と人との出逢いを大切に、利用者様にいつも寄り添った介護支援を目指しています。 |

## 研究の目的、PR ポイント

介護施設では ICT 化が進んでいます。しかし施設規模で環境は様々、施設に ICT を導入したい気持ちはあるが、値段も高くすぐには導入できない、どれを選定すれば良いか分からないといった施設は多いはず。また、導入するも操作が難解で使い切れない場合の不安も有ると思います。そんな中、自施設で今活用しているスマートフォンやチャット機能も活用した ICT 化から業務改善に繋がった経過及び結果について報告します。

## 取り組んだ課題

介護業務で改善が必要と思われる項目を重点課題として挙げました。

① 事故を減らしたい
　人手不足から他の業務も兼務しなくてはならず職員の見守り体制が薄くなり、防げる事故が未然に防げていない場合がある。

② 介護記録等の各種書類作成の負担軽減
　パソコンで記録を行いたいが、設置場所まで移動しなければならない。記録業務も時には遅れてしまい時間外勤務となることもある。

③ 多職種間での連携強化
　職員間での情報共有を円滑に行いたい。

## 具体的な取り組み

介護ロボット・スマート介護推進委員会を立ち上げ、ICT で何が出来るかを検討しました。

① 既存のナースコールをスマートフォンへ変更。

② スマートフォンへから介護記録ソフトへ入力を可能とした。

③ 連携強化を目的にチャット機能を入れ、その日の職員への周知事項、緊急伝達にも特化した。

## 活動の成果と評価

① スマートフォン画面でナースコール内容の確認や音声でのやり取りも可能となり、状況把握からの行動が臨機応変に動けるようになった。

② スマートフォンで記録を入力し介護記録ソフトへの通信を可能としたことで、その場での入力で手書きの作業も減っていきペーパーレス化、利用者の傍で仕事が出来る環境も確保できたことで、見守り体制の強化が図れ事故が減り、無駄な移動時間の排除にも繋がった。

③ 医療処置など特定の職員を呼ぶ際には、その場を離れ、探す手間など時間の無駄があったが、チャット交信に切り替えたことで、伝達速度が上がり、目視することで、職員間での情報共有にも正確性が生まれた。また、時間に余裕がでると介護職員にも変化が表れ、結果的に身体・精神的負担の軽減にも繋がりました。

## 今後の課題

自施設においては、老朽化もあり、全ての ICT 機種が使用できるわけではない。ICT 化を進めるメリットは十分感じているが、人が係らなければならない業務の方が主軸であるとし、人と ICT が融合した介護を目指します。

# 3-11

| 演題 | 記録システム導入による負担軽減と課題 |
|---|---|
| 副題 | ～介護職員記録業務の残業ゼロを目指す～ |

| | |
|---|---|
| 法人名 | 社会福祉法人 若竹大寿会 |
| 施設名 | 介護老人福祉施設わかたけ南 |



| | |
|---|---|
| 発表者名<br>（職種） | 永峯　宏<br>介護職員 |
| 共同発表者 | 奥村　萌子 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| | |
|---|---|
| 都道府県 | 神奈川県 |
| 住所 | 横浜市南区 山谷 115-5 |
| TEL | 045-315-4155 |
| FAX | 045-315-4775 |
| メールアドレス | tokunaga_toshihiro@wakatake.or.jp |
| URL | |



| | |
|---|---|
| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 横浜市南区に 2020 年に開所した特別養護老人ホームです。<br>定員は 160 名（うち、併設ショートステイ 10 名）。<br>「職員は一丸となって人を幸せにします」の法人使命のもと、自分自身が利用したいサービスの実現に努めています。 |

## 研究の目的、PR ポイント

働く介護職員の残業時間を減らして職員の負担を軽減し、モチベーション維持に繋がることを目的とした。記録システム導入が以前と比べてどう変化をもたらしたか多方面より検証した。

## 取り組んだ課題

丁寧で思いやりのある介護を心がけると相応の時間を要する。文章が苦手な職員、効率的に動くのが苦手な職員にとっては勤務時間内で業務を終わらせることが困難であり、慌てれば重大な事故に繋がりかねない。どうすれば限られた職員数で時間を作れるか考えた時、負担となっている記録業務の改善を考え、記録システムの導入に至った。

## 具体的な取り組み

同法人内事業所で記録システムを導入していない施設と導入している施設全体の残業時間、記録にかける残業時間を比較した。そして導入された当施設では記録に時間を使わないことで空いた時間をどのように活用できているか、また導入したことでどれほどの人件費が削減されたのか、職員のモチベーションにどう変化をもたらせたのか検証していく。

## 活動の成果と評価

活動の成果

〈導入前〉

- 一人当たり一月で平均およそ 10 時間から 15 時間の超過。
  うち 8 割から 9 割が記録の為の残業。
- 業務を終えることで手いっぱいで 1 日が終わってしまう。
- 残業代が常勤職員を数名雇えるほどの人件費となっている。
- 職員は、毎日記録を全員分残さなければならず超過を覚悟して業務に入る。

〈導入後〉

- 記録による超過がほとんどなくなる。
  一人あたり一月で平均 15 分から 30 分程度。
  業務内で記録を行いながら動けることによりご利用者に寄り添ったケアが可能。
- 入力が選択式なので誰もが効率的に行える。
- 職員は記録に対して困ることがなくなり、以前よりゆとりをもって業務に当たることができるため、個別ケアの充実や個別リハビリの実施、感染対応下での外出レクや食べ物レクなど職員も一緒に楽しんで仕事することができるようになった。
- 人員配置 2，5：1 の導入、有給使用数 30% Up。

評価

必要な記録をシステム化したことによりご利用者との時間を楽しめる環境に近づいたが課題も残る。

## 今後の課題

介護記録を ICT 化するには職員全員が使えるようにしていく必要がある。開所から 3 年経つが未だ手書きでメモや連絡ノートを活用する職員もおり、職員全員が使いこなすにはまだまだ時間が必要だと考える。そしてこのシステムの運用を安定させるには苦手意識のある職員に対し、実際に学びながら一緒に使用することで方法を伝えていく。また、マニュアルを用意し、いつでも見直せるようにする必要がある。そして現状のシステムでより効率的に操作できるよう課題抽出と改善を繰り返していく必要があると考える。

## 参考資料など


- 厚生労働省　都道府県労働局　労働基準監督署
  介護労働者の労働条件の確保・改善のポイント
- 早坂裕哉
  介護記録を ICT 化するメリット・デメリット
- 株式会社 NK カスタマイズ
  記録システムを導入するメリットと注意点を解説！

# 3-12

| 演題 | 虐待防止について |
| --- | --- |
| 副題 | ～利用者の尊厳を守るため～ |

| | |
| --- | --- |
| 意識改革 | |
| 安全確保 | |

| 法人名 | 社会福祉法人 照陽会 |
| --- | --- |
| 施設名 | みんなと暮らす町 |



| 発表者名（職種） | 田口　涼<br>相談員 |
| --- | --- |
| 共同発表者 | 田村　千秋 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| 都道府県 | 神奈川県 |
| --- | --- |
| 住所 | 川崎市幸区東古市場 116-12 |
| TEL | 044-520-1901 |
| FAX | 044-520-1906 |
| メールアドレス | minamachi-jim@dmail.plala.or.jp |
| URL | https://www.taiyonosono.or.jp/ |



| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 特養ユニット型個室 120 床、ショートステイ 20 床、デイサービス定員 25 名、地域包括支援支援センターを運営。「自由・勝手・気ままな暮らし」「遊びの追求」を法人の理念として掲げ、平成 20 年より運営している。 |
| --- | --- |

## 研究の目的、PR ポイント

コロナ禍において家族の面会や行事など外部と施設の接点が減少し、その結果、職員主体のケアになりかねない現状が確認された。その改善に有効な研修参加も少ないためオンライン研修を導入活用し多くの職員で課題を共有し個々の意識改革を図り利用者の尊厳を守るケアを目指した。

## 取り組んだ課題

『高齢者施設における不祥事防止に係る一斉点検』を実施したところ、職員の虐待防止に関する知識や技術の習得及び日常ケアの見直しが必要な結果となり、改善に向けた取り組みを行った。

## 具体的な取り組み

各専門の他職種による検討チームで議論を重ね E ラーニングを活用した虐待防止に関する研修を実施。次いでアンケート調査を行い意識の変化を調査。その結果を踏まえて課題を明らかにし、改善策を講じた。具体的に利用者役と職員役に扮し介護現場で起こる適切・不適切な対応をロールプレイ実施。最終アンケートを行い、さらなる意識の変化を調査。

## 活動の成果と評価

1. E ラーニングの活用は研修の場所と時間を柔軟にし、多くの職員が研修に参加できた。
2. 複数回アンケート調査を重ねる事で、職員の虐待防止に関する意識を明確化できた。
3. 適切・不適切な対応のロールプレイ体験を行う事で、虐待を受ける側の当事者意識の理解を促し、声掛けや接し方の見直しを図る事ができた。

## 今後の課題

1. 今後も定期的な研修や日頃の接遇の見直しを図り、虐待防止への取り組みを継続していく。
2. 虐待についての相談をしやすい、風通しの良い環境を作る取り組みを行っていく必要がある。

## 参考資料など


（株）ツクイスタッフ　動画研修サービス（イーケアラボ）虐待の基礎知識
民事法研究会　実践　介護現場における虐待の予防と対策

# 3-13

| 演題 | 業務改善に命をかける |
|---|---|
| 副題 | ～改善源のキャッチ～ |

| 改善の目的 |
|---|
| 目的達成 |

| 法人名 | 社会福祉法人 湘南愛心会 |
|---|---|
| 施設名 | 特別養護老人ホーム逗子杜の郷 |



| 発表者名（職種） | 山下　哲也<br>介護職員 |
|---|---|
| 共同発表者 | 齋藤　唯一 |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |
| 共同発表者 | |

| 都道府県 | 神奈川県 |
|---|---|
| 住所 | 逗子市沼間 1-23-1 |
| TEL | 046-870-6800 |
| FAX | 046-870-6805 |
| メールアドレス | morinosato-kaigo@tokushukai.jp |
| URL | |



| 今回の発表施設またはサービスの概要 | 当施設は 2014 年 5 月に逗子市に開設いたしました。JR 横須賀線東逗子駅より徒歩 7 分の緑の杜に囲まれた立地に位置し「地域に必要とされ愛される施設づくり」を目指して、ご入居者様に寄り添う介護を提供する施設運営をしています。 |
|---|---|

## 研究の目的、PR ポイント

職員、ご入居者様と「コロナとどう共存していくのか？！」制限ばかりのマイナス面だけではなく「今できることをやろう！そしてみんな笑顔で過ごそう」をキャッチコピーにし「コロナ禍はつらくもあり…でも楽しみを持って乗り越える」といった目標にした。この目標を達成するには、職員の業務負担が増える事になるが、職員の協力を得ながら角度を変え、アプローチをした結果を報告する。

## 取り組んだ課題

新型コロナウイルス対策といった中で突然、生活の変化が必要になってしまった。
それに伴い面会・外出できない等の制限により、楽しみが大幅に減少していた。
介護職員の中で「コロナ前みたく共に楽しみたい」といった思いが強くなった。多職種協議を繰り返し「今できることをやろう！そしてみんな笑顔で過ごそう！」をキャッチコピーとしたが介護部として日々業務を携わっていく中で、時間に追われてしまっていることが多く、業務量・人員不足によりスタッフの疲弊感が広がりつつあった。業務を見直し改善することで、レクリエーション・ダイバージョナルセラピーの強化に繋げ、スタッフの負担軽減を目指し、施設一丸となり業務改善に取り組む。

## 具体的な取り組み

①ソフト面の整備
　個別ケアの充実
- 業務改善をし、1 日の介護ケアに必要な人材を配置した
- 食事の内容・配膳時間・時には量や回数の変更を試みた
- 入浴日に合わせて、介護職員の人数を調整
- 上記を実施する事で、日々の介護人数に余裕を持たせた
- オムツ交換やトイレ誘導については、対象者に合わせたケアとした

＊かながわ認証の再取得→入居者・職員共に満足度 UP に繋がる
（かながわ認証ベストセレクト 20 を目指す）

②ハード面の整備
　各種機器の充実
- 入浴機器について…特殊浴増設
- トイレ内の配置変更（環境整備）…排泄介助物品の整備

　ICT 活用
- 電子カルテ
- 見守りシステム
- 体重測定機付きセンサー
- ブログの開設

## 活動の成果と評価

- 家族との面会として、リモート面会・直接面会の機会が増えた。
- レクリエーション・ダイバージョナルセラピーを実施することができ、ご利用者様にも職員にも笑顔が増えフロアに活気が生まれてきている。
- かながわ認証を取得でき、優良施設であるという承認をいただき職員は自信と責任感が生まれ始め、ご家族は安心感が持てたと声が聴かれた。
- ブログ開始をしたことで入職を目的とした問い合わせも徐々に増えている。
- ICT 化や見守りシステム効果による職員間のゆとり。

## 今後の課題

- 現状に満足せずに常に鋭い目線と発想を養い改革・改善への意欲を持てことで先を見てマンネリ化を防いでいく進化していく必要があり、そのような志しを持った職員教育が必要不可欠である